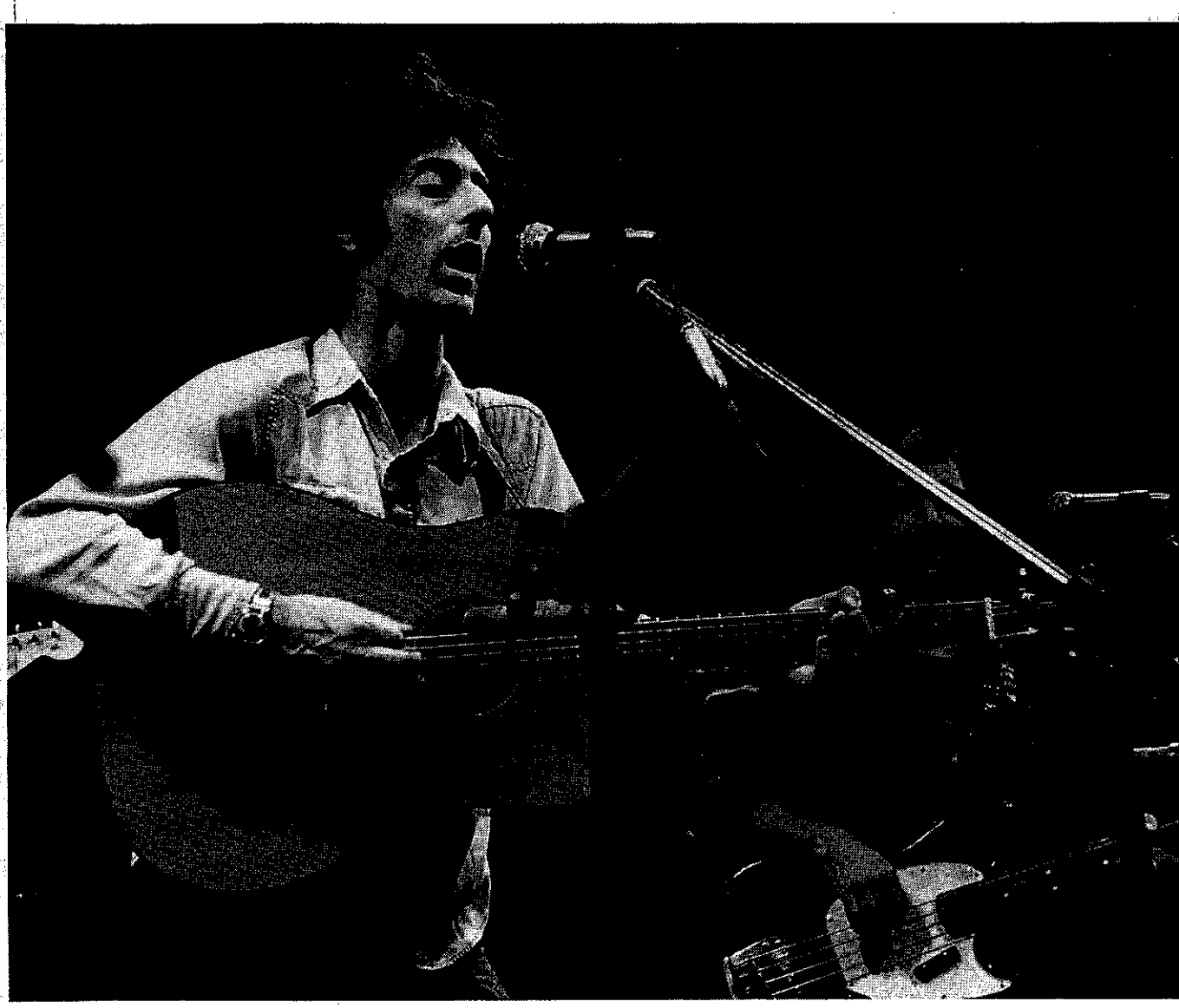
COAST TO COAST

Steve Young
Gallagher & Lyle
Larry Murray

Don Nix
British Trad
Fred Neil
Townes Van Zandt



AUG. 77' No. 5

ブリティッシュ・トラッド

Pete & Chris Coe, Boys of The Lough のステージ(前)

森 能文

本号と次号の2回に分けて、この3月英国に行って生のトラッドを聴いてこられた森能文氏に"Pete & Chris Coe"と"Boys of the Lough"のステージの事を書いて頂くことになりました。初めは Pete & Chris Coe の事からです・・・
(編集部)

• Pete & Chris Coe •

前号では彼らの演奏風景しか紹介できなかったので、今回は、その時の模様と、イギリスの典型的なフォーク・クラブの様子についてレポートしてみましょう。

■HARGA Folk Club

僕がPete & Chris Coeの演奏を聴いたのは、ロンドンの北西Wealdstonの町にある"HARGA Folk Club"という所でした。前号のカバーフォト説明で"Royal Oak Folk Club"としたのは僕の感違いで、Royal Oakというくこの名前はイギリス人のFavorite nameの一つで、やたらあちこちで目に付きます)パブの2階にある"HARGA Folk Club."というのが正しい名前でした。

この様にイギリスのフォーク・クラブというのは、パブの2階を借りてやっている所が多く、よく考えられている様にパブの中でわいわいとフォーク・ソングを歌うというのとはちょっと違います。もちろんパブの中でその様に歌ったり踊ったりする事もあるでしょうが、いわゆるフォーク・クラブというのは、入場料も取りくと言っても50p-250円位-ですが)かなりきちんと運営されています。

フォーク・クラブ内にはいわゆるカウンター(イギリスでは酒類に限らずカウンター越しに物を売る所はみな"Bar"と言うので、本当はBarですが。・・・例えば街角のFish & Chips屋なんかでも"Fish Bar"なんて看板を出している所があります)は無くて、フォーク・クラブに来た人達はみな、それぞれ下のパブから飲み物を持って来て飲みながら聴くというのが普通ですが、広いフォーク・クラブでは片すみにカウンターがあって、そこで飲物を買える様になっている所もあります。大抵の人が飲むのは、いわゆる黒ビールばかりです。

このHARGA Folk Clubは、今年で14年目を迎えるとの事で、数あるフォーク・クラブの中では最も古い部類に入ると言えます。室内は広くないと言うより、狭い位で、椅子は30人位しか有りませんが、この日は立っている人も含めて、40~50人位は入っていた様です。

■テープ・レコーダーについて

フォーク・クラブ・ナイトは7時半からだと言うので、少し早めに行った所が、もうメロディオンとハマード・ダルシマー(どんな楽器かは前号のカバー・フォトで分かると思います)の軽快なダンス曲が聴こえてきたので、大急ぎで階段を駆け上り、飛び込んでみましたが、まだ始まっていたのではなく(イギリス人が時間より早く始めるはずがない)、オーガナイザーの人が今晩の準備をしている傍で、写真で見た通りのくと言うか、紫色のニットのワン

PETE AND CHRIS COE.

ピースを着たChrisは，写真よりずっとチャーミングでしたが）Pete & Chris Coeが一生懸命にリハーサルをしている所でした。（この時に写したのが、掲号の写真です。）

イギリスではフォーク・クラブに限らずAlbionやBoys等のコンサート・ホールでも，テープ・レコーダーの持ち込みは全く自由なので，ここでもYAMAHAのデッキやSONYのデンスケ，果てはドイツ製のオープン・リール・デッキを持ち込んでいる人もいました。

僕もソニーのコンパクトなカセットでリハーサルから録音を始めましたが，Peteがそのカセットに興味を持って「どこのだ？いくら位する？」などと色々質問してきて，とても欲しそうでしたが，値段を聞いて，残念そうな顔をしていました。彼にとっては高くて買えない様な感じで，日本と違ってオーディオ製品には恵まれていない事が何度そうに思えました。（日本だったら中学生でもラジ・カセを持っているのに。）

■前座の人々

8時頃になって，やっとCaller（司会者）が立ち上がり，よく響く声で何やら喋りだし，フォーク・クラブ・ナイトが始まりましたが，何とそのCallerがポケットに片手をつっ込んで，いきなり歌い出しました。そしてその声は，Martin CarthyやNic Jones，Tony Roseにも通じる生粋のイングランドのトラッド・シンガーのそれで，不意をつかれた僕としては，その最初のひと声にガーン！と圧倒される様な思いでした。

前座としては他にも女の子を含めて何人か歌いましたが，（その可愛らしさ程には歌の方は良くなかった女の子を除いて）シー・シャンティからバラッドまで，みな無伴奏の素晴らしいシンギングを聴かせ，その飾り気ない歌いっぷりに，ブリティッシュ・トラッド・シーンの底深さを強く感じる思いでした。

■Pete & Chris Coe

前座がひとしきり終わったところで，Callerに紹介されて，ゲストであるPete & Chris Coeが登場しました。

彼等は，前座の人に比べてかえって声量的には劣る位なのですが，ダンス・チューンからバラッドまで，トラディショナルとオリジナルを混ぜた多彩なしパートリーと巧みな楽器演奏とで，予想通り十分に楽しませてくれました。

特に，メロディオンとハマード・ダルシマーによるポルカ等のダンス・チューンでの二人の息の合った演奏は，非常に躍動感にあふれていて素晴らしく，Albionとは又違った，そのままの形での（イングランドの）トラディショナル・ダンス・ミュージックの継承のされ方を見る思いでした。

歌の面でも，彼等らしい特徴的なアレンジとオリジナルソングの味わいは，声量的な不利を十分にカバーしていて，特に"Two Sisters"や"Farewell To The Brain""Welcome Cold November"などは非常に味わい深いものが有りました。

そしてフォーク・クラブの良い所は，聴衆がコーラスを付けたり，ハミングをしたりする事です。コーラス部分のある歌の時は，フォーク・シンガー達は歌う前にその歌のコーラス・パートを示すのが普通なので，知らない人でもすぐ分かりますし，二，三度そのコーラスを繰り返せば，すぐに覚えられるので，誰もが参加することが出来ます。また良く知られている曲などでは，下のパートをハミングする人なんかもいて，シンガーの歌とそのハミングが何とも良い雰囲気を作るものなのです。

昔ながらのトラディショナルなフォーク・シンギングの形態というものは，社会機構が変化してしまった今日では，この様なフォーク・クラブにおいてこそ残っている，と言えるのではないでしょうか。

Welcome Cold November

Pete & Chris Coeもアルバムをレコーディングする場合には"Out Of Season Out Of Rhyme"の様に多彩なバックを付けますが、やはりその真価というものは、この様なフォーク・クラブの中で発揮される様に思えました。

〈追記〉

最新のニュースでは、Pete & Chris Coeは、Tony Rose と Nic Jones という2大シンガーと一緒にグループを結成したそうです。と言うことは、ここにボーカル，インストゥルメンタル両方が共に強力という、ニュー・グループの誕生というわけで、はたしてどの様なアルバムが出来るのか非常に楽しみです。

• Boys Of The Lough •

次に、Boys of the Lough のコンサートを見る機会がありましたので、彼等の紹介と共に、そのコンサートの模様をお伝えしましょう。

■ Boys of the Lough

Boys of the Loughはアイルランド，スコットランド，そしてセーターでその名を知られるスコットランド北方の島－シェトランド諸島の音楽をレパートリーとする4人組です。シェトランド諸島はもちろんスコットランドの一部になるわけですが、音楽的にはスコットランドより北アイルランドに近似していて（これは主に漁師達の交流の結果だということです）、特にフィドル・ミュージックに特長的なものを持っているので、スコットランドとは区別されるようです。

ところで、よく誤って発音されますが、このグループの名前の正しい発音は"ボーイズ・オブ・ザ・ロッ゛ク〔lok〕"です（米語ではラック〔lak〕）。"lough"とは、ほぼ英語の"lake"に当たるアイルランド方言で、湖や深い入江のことを意味します。スコットランド方言では同じ発音で綴りが"loch"になります。

Boysのメンバーは，マンドリン（mandoline），バンジョー（banjo）、シターン（Cittern），コンセルティーナ（concertina）担当でノーサンバランド出身のDave Richardson，フィドラーでシェトランド出身のAly Bain，そして2人のアイリッシュ，フルート（flute），ホウィッスル（whistle）のCathal McConnellと、ボラン（bodhran），コンセルティーナのRobin Mortonで、ヴォーカルもこの2人のアイリッシュが受け持ちます。

しかしBoysがこのライン・アップとなったのは73年からで、それ以前71年のデビューから73年迄は、今のDave Richardsonの位置にDick Gaughanが居ました。

Boysが現在までにリリースした5枚のアルバムの内，デビュー・アルバムが以前のメンバーによるもので、その中では歌の面でもスコットランドのバラッドなどが取り上げられていましたが（Dick Gaughanは当代最高のスコッツ・シンガーと言われている人ですから），現在はレパートリーの内、歌に関してはアイルランドのものに片よっています。（Robin Mortonはアイリッシュ・ソングのコレクターとしても有名で、すでに2冊の本を出版しています。）

Cathal McConnell　Aly Bain

Dave Richardson　Robin Morton

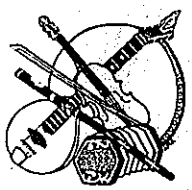
■ボラン，ホウィッスル，コンセルティーナについて

ここに名前の出てきた楽器の中で、トラッドを聴き始めたばかりの人には、まだお馴染みでない楽器について、少し解説をしておきましょう。

ボランというのは（アイルランドの言葉なので発音は"Boran"ですが"Bodhran"と綴ります）、山羊皮を用いた一枚皮のドラムです。つまり、タンバリンの様な形で、大きさはずっと大きいもの、と考えれば良いでしょう。支持するために、皮の張られていない側に十字に"張り"が入っているので、それを左手で持ち、右手で両方が頭となった（この様な形）20cm位のスティックで叩きます。アイルランド特有のもので、アイリッシュのトラッドには、必ずといっていい程に用いられるものです。

ホウィッスルも同じくアイルランドのトラッドには欠かせないものです。構造はレコーダーと殆ど同じと考えて良いのですが、穴が上側に6つしかなく、管は大抵銅やすずなどの金属でつくられます。（その材質によって、tin-whistleとか、penny-whistleなどと呼ばれます。）昔は吹き口も金属で作られたのでしょうが、今のホウィッスルは、みな青や赤のプラスチックの吹き口をつけています。先に書いたように、穴は6つしかないのですが、over-blowingすることによって、2オクターブ位は簡単に出すことが出来ます。

コンセルティーナはアイルランドに限らずイギリスの他の地方や、イギリス以外のヨーロッパ各地でもよく見かける事があると思いますが、"6角形をしたアコーディオン"とでも言った風の楽器です。しかし、現在ブリティッシュ・トラッドに用いられているコンセルティーナには大きく分けて2通りあり、アングロ・コンセルティーナ（Anglo－）といって、同じKeyを押しても、蛇腹を押した時と、引いた時（空気が出る時と、入る時）とで、異った音の出るもの（つまり、ハーモニカと同じ様なリードを持つ）と、イングリッシュ・コンセルティーナ（English－）といって、押した時も引いた時も同じ音が出るものに分かれます。



<手前から>
フルート，コンセルティーナ，フィドル，シターン，ボラン

アングロの方がどちらかというとメリハリの効いた音を出す事が出来、ダンスの伴奏等には適しているので、John KirkpatrickやAlbionのJohn Rodd等、モーリス・ダンスの伴奏に用いられるのも、みなこのアングロの方ですし、元来トラッドに用いられていたのは、この方だという事です。

イングリッシュの方は、その性質上、歌の伴奏に適していて、演奏も簡単なので、現在はシンガー達がよく伴奏に用いますが、元来は村々のクラシック・バンドで用いられていたそうで、トラディショナルミュージックに用いられる様になったのは、最近のことだそうです。

Boysの2人が用いているのは、このイングリッシュ・コンセルティーナの方です。

（以下、次号へ続く）

急募！

Coast to Coastでは、現在、版下作業を手伝って下さる方を募集しています。今回から版下作業スタッフの戦力がダウンしたため、この様に見苦しい紙面となっていますが、次号より何とかもう少し見やすいものとすべく協力者を募っている次第です。やってみようと思う方は、葉書で編集部まで御連絡下さい（電話番号を必ず書いて下さい）。